



●さまざまな顔料・ローシェンナ

この土絵具は、ハプスブルク王朝の夏の離宮・シェーンブルン宮殿を彩る「シェーンブルン・イエロー（Schönbrunner Gelb、別名「マリア・テレジアン・イエロー」ほか）」を始め、多様な色名を持つ。

鉄の酸化物と水酸化物を含む天然土で、世界各地で産出する。着色成分はゲータイト（針鉄鋼）という鉱物。

黄土色のうち、ローシェンナは例外的にマンガ化合物（酸化マンガ）を含むため、加熱すると茶色を帯びる。

黄土色は先史時代から用いられるが、ローシェンナが顔料として最初に記述されたのは18世紀である。

建築の壁面塗料としては各地で何世紀にもわたり愛されてきたが、天然素材ゆえ、正確な色調の再現は常に課題であった。

そのため19世紀後半からは、合成酸化鉄顔料が急速に普及し、学校教材においてさえ一般化した。

（『色彩の書（Das Farbenbuch）』（第2版、2023年）より土絵具①）（主査：山根千明）



●日本の伝統的な色名・朽葉色

朽葉色は、源氏物語に「朽葉色の薄絹」、「赤朽葉のうすもののかざみ」、「青朽葉」と、朽葉が色名として使われている。枕草子にも「朽葉」、「黄朽葉の織物」、「夏は青朽葉」などと数回登場している。

朽葉とは、枯れ落ちた木の葉を指すが、最初は赤や黄のもみじの落ち葉を主に指していたようで、やがて、一般の広葉樹の落ち葉の色も指すようになったと思われる。

最初に定着していったのは「朽葉色」、「赤朽葉」、「黄朽葉」、「青朽葉」、「薄朽葉」などの色名である。

朽葉のような基本色名に、赤黄青の色相を表す名詞、明暗や鮮濁を示す形容詞などを組み合わせた色名を変相色という。

「朽葉色」は、近世の基本色「茶色」の役割を果たして「朽葉四十八色」の言葉もある。

平安時代までは茶色系の染色は、杉染、くるみ染、香染や櫨染によっていたが、鎌倉時代に栄西が宋から茶を持ち帰った茶の再興により、禅寺での喫茶のほか、蒸した茶の葉を使う茶染めによる染色が始まり「茶色」という呼称が生まれ、江戸時代に入り「四十八茶」という茶色のブームが到来し、「朽葉色」の別色名として「黄唐茶」が現れる。（永田泰弘）

●大辞泉ひろいよみ 86一こ

黄老：こうろう。黄帝と老子。

紅露時代：尾崎紅葉と幸田露伴とが主導的立場にあった明治二〇年代の近代文学史上の一時期。

牛黄：ごおう。牛の胆嚢に生じる黄褐色の結石。漢方で狭心症、胃炎、腎盂炎などに薬用。

氷襲：こおりがさね。襲の色目の名、表はつやのある白、裏は白無地。冬に用いる。白い鳥の子紙を二枚重ねたもの。手紙や歌を書くのに用いた。

黄金色：こがねいろ。黄金のもつ、輝く黄色。山吹色。こんじき。きんいろ。

木枯らし茶：こがらしちゃ。染め色の名。枯れ葉のような茶色。橙色を帯びた焦げ茶色。

焦がれ香：染め色や織り色の名。薄紅に黄色を加えた濃い香色。襲の色目の名。表は濃い香色、裏は紅色。

濃き色：染め色や織り色の名。濃い紫色。また、濃い紅色。

呼吸色素：生体内に含まれ、呼吸に際し分子状の酸素と結合して、組織の細胞に酸素を運搬する色素。ヘモグロビンなど。

黒闇・黒暗：こくあん。暗闇、暗黒。また仏教で迷いの闇。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）